

千里馬作業班運動と千里馬運動の目的 生産性の向上と外貨不足

宮本 悟

(聖学院大学)

はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）では、1999年1月1日の『労働新聞』と『朝鮮人民軍』、『青年前衛』共同社説で、強盛大国建設のために「第2の千里馬大進軍」を始めることが提起された（『労働新聞』1999年1月1日）。「第2の千里馬大進軍」そのものは2000年代に入ると下火になったが、千里馬は社会主義建設の象徴として現在でも北朝鮮でよく使われる言葉である。それは内閣総理である朴奉柱が2013年5月1日に語ったように、朝鮮戦争停戦後の経済復興期において北朝鮮の最高指導者であった金日成が社会主義建設を推し進めた代表的な功績が、生産高揚運動である千里馬運動であるからである（『労働新聞』2013年5月2日）。

生産高揚運動とは、社会主義競争運動とも呼ばれ、労働生産性を高めるための大衆運動を意味する。ソ連におけるスタハノフ運動や中国における大躍進運動が代表例である。千里馬運動もその一つである。その千里馬運動が最も深く発展したのが、千里馬作業班運動であると金日成は語っている（金日成 1961）。1961年に開催された朝鮮労働党第4次大会において千里馬運動は、朝鮮労働党が推進する社会主義建設の基本方針である総路線と定められた（金日成 1961）。1972年に制定された社会主義憲法でも、千里馬運動が社会主義建設の総路線と定められた。北朝鮮では、千里馬運動によって労働生産性が高まって社会主義建設が推進されたと考えられているといえよう。

千里馬運動は、単なる生産高揚運動ではなく、労働生産性を高めること以外にも目的があったこ

とが多くの研究で論じられてきた。北朝鮮でも、ロ・ビョンフンが、1956年末から労働生産性を高めるために千里馬運動が推進され、1959年3月から労働者に共産主義思想を教育するために千里馬運動の発展した千里馬作業班運動が推進されたと論じている（ロ・ビョンフン 1965: 45-50）。韓国では、柳吉在や金鍊鉄が、千里馬運動が推進される4ヶ月前の1956年8月から北朝鮮において思想闘争が始まったため、同年12月から人々に共産主義思想を教育する目的で千里馬運動が推進されたと論じている（柳吉在 1996: 64-71；金鍊鉄 2001: 201）。日本でも、千里馬運動に共産主義思想を教育する目的もあったと論じた高瀬の研究がある（高瀬 1973: 236）。千里馬運動と千里馬作業班運動が混同される場合もあるが、いずれにせよ千里馬運動や千里馬作業班運動の目的に思想教育があったことは疑う余地がない。

しかし、千里馬運動や千里馬作業班運動は、本来は労働生産性を高めるための生産高揚運動である。にもかかわらず、千里馬運動や千里馬作業班運動にどのような経済目的や効果があったのかを論じた研究は少ない。イ・テソプは、物資不足によって行われてきた配給制度を廃止する目的で、物資不足を解消するために労働生産性を高める千里馬運動が推進されたと論じている（イ・テソプ 2001: 174-181）。しかし、配給制度は現在でも廃止されていない上に、千里馬運動は配給する物資と関係がない金属工業などの分野でも推進されたので、この議論が誤りであることは明白である。また、日本では、技術発展を促進するために千里馬運動が推進されたと論じた桜井浩の論文がある（桜井 1963: 7-8）。技術発展は労働生産性を高める

ものであるが、桜井は技術発展を促進する目的や効果については論じていない。千里馬運動や千里馬作業班運動の経済目的やその効果についてはまだ明らかになっていないといえよう。

さらに、千里馬運動がいつ始まったのかも正確には知られていない。現在の北朝鮮における公式見解によれば、1956年12月に開催されたいわゆる12月全員会議が千里馬運動の発端になっている。しかし、後藤富士男が論じるように、それは後に定義されたものであり、当時には千里馬という名称がついた運動はなかった（小此木 1997: 170）。まして、千里馬という名称の由来すら疑問がある。「朝鮮の伝説の千里馬」とよく言われるが、千里馬は古代中国の歴史書に出てくる駿馬を意味する言葉であり、伝説上の動物ではない。

従って、本稿では、千里馬運動や千里馬作業班運動の経済目的とその効果について論じるとともに、千里馬運動の変遷も考察することによって、千里馬運動が社会主義建設における総路線と定められた理由を明らかにしたい。そのため、本稿では、千里馬運動が推進され始めた北朝鮮で定義されている1956年から、社会主義憲法に千里馬運動が社会主義建設の総路線と定められた1972年までを考察の対象としたい。

1. 増産競争運動

増産競争運動とは、1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争の以前から、北朝鮮において推進されてきた生産目標を超過達成することを目的とする生産高揚運動である（金日成 1979: 395）。1953年7月27日に朝鮮戦争が停戦した後から推進されてきた戦後復興3カ年計画においても増産競争運動が始められた。1954年3月21日に金日成は、朝鮮労働党中央委員会全員会議で労働党組織が増産競争運動を推進することを要求した（金日成 1960a: 139）。4月9日には、朝鮮労働党の機関紙である『労働新聞』で労働者や事務員が増産競争運動を推進していることが紹介された（『労働新聞』1954年4月9日）。

戦後復興3カ年計画の最後の年である1956年になると、戦後復興3カ年計画に続いて、第1次

5カ年計画を推進するための課題が討議された。金日成は、1956年2月16日に朝鮮労働党中央委員会常務委員会で、第1次5カ年計画を推進する上で労働力不足を解決するために作業の機械化と労働の合理化、労働者の技術水準向上が必要であると語った（金日成 1980a: 86-89）。さらに金日成は、4月2日に内閣第3次全員会議において、外貨が不足しているため輸入資源を節約し、輸出業を拡大させて外貨を獲得しなければならないと語った（金日成 1980b: 123-124）。労働力不足と外貨不足を解決することが、第1次5カ年計画における重要な課題であったといえよう。

第1次5カ年計画では、労働力不足と外貨不足を解決するために生産高揚運動が推進されることになった。1956年4月23日に開催された朝鮮労働党第3次大会の決定書で、第1次5カ年計画において増産競争運動を推進する事業を朝鮮労働党や社会団体に委任することが決定された（『労働新聞』1956年4月30日）。12月11日に開催された朝鮮労働党中央委員会全員会議（以下、12月全員会議）では、外貨不足を解決するために輸入資源を節約して、労働力不足を解決するために労働生産性を高めることを目的とした生産高揚運動を推進することが決定された（『労働新聞』1956年12月15日）。

第1次5カ年計画における生産高揚運動は、降仙製鋼所（現在の千里馬製鋼連合企業所）で最初に始められた。1956年12月28日に降仙製鋼所を訪問した金日成は、全国で最初に降仙製鋼所が生産高揚運動を始めることを要請した（『労働新聞』1956年12月30日；藤島 1966: 135）。1957年1月8日に降仙製鋼所において従業員決起大会が開催され、原料資材の節約や計画の超過達成など4項目にわたる運動を始めることが決議された（『労働新聞』1957年1月10日）。計画を超過達成することは、当初の計画よりも目標生産量をさらに高く設定することを意味した。後に千里馬作業班運動を推進することを全国に呼びかけることになる降仙製鋼所の陳応源は、生産高揚運動を推進するために作業班の目標生産量を4万5000トンから6万トンに改めたと回想している（藤島 1966: 136）。降仙製鋼所では、外貨不足を解決するために原料

資材を節約し、労働生産性を高めるために当初の計画よりも目標生産量をさらに高く設定する生産高揚運動を始めたといえよう。

降仙製鋼所では、この生産高揚運動は増産競争運動と呼ばれていた（『労働新聞』1957年1月10日）。しかし、他の企業所で始められた生産高揚運動は、様々な名称が付けられていた⁽¹⁾。企業所ごとに様々な名称が付けられていたことは、この生産高揚運動が職場や企業所などの小さな単位で管理されていたものであり、全国単位で管理されていた運動ではなかったことを意味すると考えられる。

外貨不足を解決するために輸入資源を節約するだけではなく、輸出業を拡大して外貨を獲得することも推進された。金日成は、1957年4月6日に内閣第3次全会会議で、輸出業を拡大して外貨を獲得するために様々な分野で生産量を増加させなければならないと主張した（金日成 1981: 106-107）。さらに、9月18日から開催された最高人民会議第2期第1次会議における演説で金日成は、輸出業を活性化させるために輸出品の種類を増加させ、品質を高めなければならないと主張した（金日成 1957）。当初の計画よりも生産量を増加させる増産競争運動などの生産高揚運動は、輸出業を拡大することによって外貨を獲得する目的もあったと考えられよう。

2. 集団的革新運動

1958年に入ると、朝鮮労働党は第1次5カ年計画において技術発展を促進するようになった。1958年3月3日に開催された朝鮮労働党第1次代表者会において国家計画委員会委員長である李鐘玉が、技術発展を促進することによって労働生産性を高めることが第1次5カ年計画を推進するために最も重要な条件の一つであると語った（李鐘玉 1958）。3月6日に発表された朝鮮労働党代表者会の決定書では、技術者養成が目標として掲げられた（『労働新聞』1958年3月8日）。朝鮮労働党は、技術発展を促進することによって、労働生産性を高めようとしていたことが分かる。

朝鮮労働党代表者会の決定を実行するために、

1958年3月10日に労働組合である朝鮮職業総同盟の中央委員会第9次拡大全会会議が開催された（『労働新聞』1958年3月11日）。3月12日に発表された朝鮮職業総同盟中央委員会第9次拡大全会会議決定書では、職業総同盟が労働生産性を高めるために技術発展を促進することが明らかにされた（『労働新聞』1958年3月14日）。技術発展を促進することによって労働生産性を高める事業は、職業総同盟が推進することになったといえよう。

職業総同盟は、技術発展を促進するために生産高揚運動を作業班単位で組織することにした。この生産高揚運動は1958年8月頃から集団的革新運動と呼ばれ始めた。職業総同盟中央委員会委員長である韓相斗は、1958年9月8日に『労働新聞』に論文を掲載して、集団的革新運動をさらに拡大させるために、技術導入の状況に合わせて実践ブリガダ（作業班）を組織することを主張した（韓相斗 1958a）。集団的革新運動と呼ばれるようになった生産高揚運動は、技術発展を促進するために作業班単位で組織される運動になったといえよう。

1958年9月13日に開催された全国生産革新者大会では、集団的革新運動が増産競争運動よりも高い段階の新しい運動形態であると定義された。全国生産革新者大会において韓相斗は、12月全会会議の決定を実行する過程において、生産高揚運動が個々の運動から集団的革新運動に発展したと語った（韓相斗 1958b）。企業所で個別に推進されてきた増産競争運動などの生産高揚運動は、職業総同盟が中心となって作業班単位で推進する全国単位の運動となったために、集団的革新運動という増産競争運動よりも高い段階の新しい運動形態に発展したと定義されたと考えられよう。

この頃には、第1次5カ年計画をただ完遂するだけではなく、繰り上げて完遂することが要求されはじめた。1958年9月8日に開催された朝鮮民主主義人民共和国創建10周年記念慶祝大会において金日成は、多くの企業所が第1次5カ年計画を1年半繰り上げて完遂することを決議したことを例にあげて、第1次5カ年計画を繰り上げ完遂することを要求した（金日成 1958b）。

先述の全国生産革新者大会は、第1次5カ年計画を繰り上げ完遂することを討議するために開催

されたものであった（『労働新聞』1958年9月14日）。全国生産革新者大会では、第1次5カ年計画を繰り上げ完遂するために技術発展を促進することが主張された。1958年9月16日に全国生産革新者大会において金日成は、労働者一人一人が技術を習得し、現場から技術を開発することを主張した（金日成 1958c）。同日に、全国生産革新者大会の決議文が発表され、集団的革新運動において技術者の役割を高めて、第1次5カ年計画を1年半繰り上げて完遂することが決議された（『労働新聞』1958年9月17日）。集団的革新運動は、技術発展を促進して、第1次5カ年計画を繰り上げ完遂することが目的になったといえよう。

北朝鮮では、集団的革新運動だけではなく、技術発展を促進するために教育水準を高めることも推進された。1958年10月1日に開催された最高人民会議第2期第4次会议において、中等義務教育制を11月1日から実施することを教育文化相である李一卿が提起した（李一卿 1958）。翌10月2日に労働者の一般知識水準と技術知識水準を高めるために中等義務教育制を実施する法令が発表された（『労働新聞』1958年10月3日）。北朝鮮では、それだけ技術発展の促進が経済発展のために必要であると考えられていたといえよう。

3. 千里馬作業班運動

千里馬は、1日に千里（朝鮮半島では約400km）を駆ける朝鮮半島の伝説の動物として現在の北朝鮮で流布しているが、1958年まで北朝鮮社会では一般的に知られた存在ではなかったようである。千里馬という言葉は、漢朝期に書かれた司馬遷の『太史公書（史記）』の楽書や趙世家、匈奴列伝に記されているほど中国大陸では古い言葉であるが、伝説上の動物ではなく、実際に存在する優れた馬を意味する。

千里馬という言葉が『労働新聞』で最初に使われたのは、1958年6月8日付『労働新聞』に掲載されたチョ・グンウォンという労働新聞社記者による「オチェルク（実話文学）」というコラムのタイトルであった。このコラムでは、万年鉦山のパク・ヨンスが社会主義建設を速く推進するプ

リガダの姿を見て、千里の海を飛び越える龍馬を思い出すことが紹介された（チョ・グンウォン 1958）。翌6月9日から開催された最高人民会議第2期第3次会议が進行する中で、6月11日に金日成は「全勤労働者は党の呼びかけに従い、千里馬に乗って社会主義を目指して前進しています」と語った（金日成 1958a）。この演説が『労働新聞』に掲載された翌日である6月13日から2日にわたり、『労働新聞』の1面に掲載されるスローガンに千里馬という言葉が使われた（『労働新聞』1958年6月13日；『労働新聞』1958年6月14日）。6月18日からは『労働新聞』に「千里馬」というコラムが掲載され始めた（『労働新聞』1958年6月18日）。

さらにプロレタリア文学作家として高名な李箕永が、1958年11月13日と14日に『労働新聞』に「今日の千里馬」というエッセイを掲載し、千里馬という言葉に文学上の権威を与えた。李箕永は、現在の社会主義建設の速い推進が、1日に千里を駆ける龍馬という封建時代の神話を再現していると論じ、朝鮮半島の伝説の動物は龍馬であって、それを千里馬と同一視することで権威を与えたのである（李箕永 1958）。「今日の千里馬」が掲載された翌11月15日には、岐陽機械工場で千里馬号というトラクターを生産したことが報道された（『労働新聞』1958年11月15日）。11月18日には平壤市人民委員会地方産業鉄材日用品工場で千里馬号というオートバイを生産したことが報道された（『労働新聞』1958年11月18日）。チョ・グンウォンが千里馬と龍馬を同一に扱い、金日成や李箕永がそれに権威を与えたことで、千里馬が朝鮮半島の伝説の動物として流布されたと考えられよう⁽²⁾。

平壤の万寿台にある千里馬像によって千里馬には翼があるイメージが流布しているが、これも新たに創作されたものである。万寿台に千里馬像を設計する際に彫刻家たちは、人を1人ずつ乗せた3頭の馬が駆ける姿と1人の騎手が1頭の馬に乗って走る姿を構想していたが、金日成が普通の馬ではなく、翼のある馬に乗って駆ける姿にしてはどうかと提案したことによって現在の姿に設計されたという（呉泰石・白峰・李相奎 1979: 335）。

これらの創作によって、有翼馬である千里馬が社会主義建設を象徴するようになったといえよう。

権威を与えられた千里馬という言葉は、生産高揚運動の名称にも使われることになった⁽³⁾。金日成は、1959年1月19日に生産高揚運動を「千里馬運動」と語った（金日成 1988: 92）。さらに、この頃には新たな生産高揚運動が必要とされ始めていた。その理由の一つは、労働生産性を高めるための技術発展が、工業製品の質を高めるためにも必要とされ始めたからである。2月23日から25日にかけて朝鮮労働党中央委員会全員会議（以下、2月全員会議）が開催され、内閣第1副首相である金一が工業製品の質を高めることを主張した（『労働新聞』1959年2月26日）。3月2日に内閣は、労働者の一般知識や技術水準を高めるために、授業料の廃止や大学と専門学校を増設することを決定した（『労働新聞』1959年3月3日；『労働新聞』1959年3月6日）。

もう一つの理由は、金日成が労働者に共産主義思想を教育する必要があると考え始めたことによる。1958年11月20日に金日成は、以前に朝鮮労働党の政策に反対する者が多かったため、朝鮮労働党の政策をさらに推進させるには労働者に共産主義思想を教育しなければならないと主張した（金日成 1958d）。金日成は、朝鮮労働党の政策に反対する者が再び出てこないようにするために、労働者に共産主義思想を教育する必要があると考えていたといえよう。

1959年2月17日に金日成は降仙製鋼所を訪問し、技術水準を高めるための事業と共産主義思想を教育するための事業を推進することを要求した（『労働新聞』1959年2月19日；陳応源 1969: 56-58）。3月9日に降仙製鋼所の陳応源の作業班は総会を開催し、新しい生産高揚運動を開始することを決定した。その生産高揚運動の名称にも千里馬が使われ、千里馬作業班運動と名付けられた。千里馬作業班運動の目的は、1つ目に第1次5カ年計画を1959年内に超過遂行することであり、2つ目に共産主義思想教育を強化することであった（『労働新聞』1959年3月10日）。千里馬作業班運動が以前の生産高揚運動と違うところは、運動の目標を記す任務条項に、労働生産性を高めること

だけではなく、技術や共産主義思想を学習することを明記したことにありと陳応源は回想している（藤島 1966: 137）。千里馬作業班運動は、労働生産性を高めるだけではなく、技術や共産主義思想を学習することを目標としていたことに特徴があるといえよう。

1959年3月14日に職業総同盟中央委員会第12次拡大全員会議が開催され、2月全員会議で決定された工業製品の質を高める事業と千里馬作業班運動を全国に拡大することが討議された。3月15日に職業総同盟中央委員会第12次拡大全員会議では、数年以内に工業製品の質を先進国家の水準にまで高めることと、労働者の技術水準を技術者の水準にまで高めるために千里馬作業班運動を全国に拡大することが決定された（『労働新聞』1959年3月16日）。職業総同盟は、工業製品の質を高めるために千里馬作業班運動を全国に拡大しようとしたと考えられよう。

さらに、職業総同盟中央委員会第12次拡大全員会議では、千里馬作業班運動で特別な成果を達成した作業班や職長、企業所集団に対して該当する評価と表彰を与えることを職総中央委員会常務委員会に委任することが決定された（『労働新聞』1959年3月16日）。1959年3月17日に職業総同盟中央委員会委員長である李孝淳が、陳応源の作業班員に対して千里馬作業班称号を授与した（『労働新聞』1959年3月19日）。千里馬作業班運動は、職業総同盟が管理する全国的な生産高揚運動となったといえよう。

陳応源の作業班員に対する千里馬作業班称号の授与式において李孝淳は、千里馬作業班運動が今までの生産高揚運動よりもさらに高い形態の運動であると語った（『労働新聞』1959年3月19日）。千里馬作業班運動は、12月全員会議から推進されてきた生産高揚運動を継承するものであり、より高い形態の生産高揚運動であると位置づけられたといえよう。

朝鮮労働党や職業総同盟が工業製品の質を向上させようとしたのは、輸出入を拡大させるためでもあったと考えられる。輸出入を拡大させるために工業製品の質を高める必要性は、以前から指摘されてきた。1958年6月5日に開催された朝鮮

表1 北朝鮮の対ソ貿易推移

	対旧ソ連 (単位: 100 万ルーブル)		
	輸出	輸入	収支
1953年	23.1	29.5	-6.4
1954年	25.0	16.5	8.5
1955年	36.7	39.7	-3.0
1956年	46.1	48.4	-2.3
1957年	56.3	54.0	2.3
1958年	42.4	52.2	-9.8
1959年	46.4	73.6	-27.2
1960年	67.2	35.5	31.7
1961年	71.2	69.3	1.9
1962年	79.4	72.6	6.8
1963年	79.3	73.9	5.4
1964年	72.6	74.6	-2.0
1965年	79.5	80.8	-1.3
1966年	83.1	77.0	6.1

(Международные отношения 1967: 66-67)

労働党中央委員会全員会議でも、金日成は、輸出業を拡大させるために、納品期限を守ると同時に製品の品質を高めなければならないと主張した(金日成 1960b: 536-537)。

北朝鮮にとって貿易額の多くを占めるソ連との貿易では、1950年代末まで北朝鮮側の赤字が続いていた。1958年の対ソ貿易では980万ルーブルという1953年以来の最大の赤字であったし、1959年の貿易収支も2,720万ルーブルの赤字であった。北朝鮮では輸出業を拡大させて外貨を稼ぐことが重要な課題であったといえよう(表1参照)。

千里馬作業班運動を開始した降仙製鋼所で生産される鋼鉄などの金属工業製品は、北朝鮮において重要な輸出品であった。1953年における北朝鮮の輸出品は、原材料である鉱物類が輸出総額の85%を占めており、金属工業製品は9.1%に過ぎなかった。しかし、千里馬作業班運動が始まった1959年における北朝鮮の輸出品は、鉱物類が輸出総額の14.5%となり、金属工業製品が33.4%を占めた。翌1960年には金属工業製品が輸出総額の43.7%を占めた(表2参照)。金属工業製品は、北朝鮮における輸出総額の約半分を占める主要輸出品であったといえよう。

1950年代末に北朝鮮の輸出品総額全体で金属

表2 北朝鮮における輸出品構成推移(輸出総額に対する割合)⁽⁴⁾

	鉱物類	金属工業製品	化学工業製品	食料品および嗜好品
1953年	85.0%	9.1%	—	4.6%
1956年	54.3%	30.9%	5.9%	1.3%
1957年	39.1%	35.0%	13.4%	11.2%
1958年	23.6%	38.3%	15.1%	19.0%
1959年	14.5%	33.4%	13.4%	12.2%
1960年	12.8%	43.7%	12.1%	6.3%
1961年	11.7%	47.2%	8.9%	3.7%
1962年	11.2%	48.5%	8.8%	7.3%
1963年	12.4%	46.3%	7.2%	7.4%

(『朝鮮中央年鑑』1959年版: 207; 『朝鮮中央年鑑』1961年版: 202; 『朝鮮中央年鑑』1962年版: 260; 『朝鮮中央年鑑』1963年版: 230; 『朝鮮中央年鑑』1964年版: 197)

工業製品が大きな比重を占め始めたことは、ソ連との貿易でも同じであった。それは、金属工業製品の代表的な鉄製品で見れば、一目瞭然である。1955年のソ連への総輸出額のうち、鉱物類は60.7%を占めていたが、鉄製品は8.6%に過ぎなかった。ところが、1959年には鉱物類が19.1%で、鉄製品が18.8%であり、ほとんど同じ割合になっている。1962年には鉱物類が2.9%で、鉄製品が44.8%になり、鉄製品が対ソ総輸出額の約半分を占めるまでになった(表3参照)。

千里馬作業班運動によって金属工業製品をはじめとする工業製品の質を高めることは、対ソ貿易収支を好転させて外貨を獲得するために必要であったと考えられる。千里馬作業班運動が開始された翌年である1960年から対ソ貿易収支は3,170ルーブルの黒字となり、1963年まで黒字が続いた(表1参照)。『朝鮮中央年鑑』1956年版では、1955年度に金属工業製品は主にソ連に対して輸出され、中国への主要輸出品に金属工業製品が含まれていないことが明らかにされている(『朝鮮中央年鑑』1956年版: 118)。1960年代に入っても中ソに対する主要輸出品の内容に大きな変化がないとすれば、対ソ貿易収支を好転させたのは金属工業製品の輸出額増加が原因の一つと考えられよう。従って、千里馬作業班運動は、工業製品の質を高めることによって、対ソ貿易収支を好転させて外貨を獲得するための生産高揚運動でもあったといえよう。

表3 北朝鮮からソ連への総輸出額における鉱物類と鉄製品の割合

	鉱物類	鉄製品
1955年	60.7%	8.6%
1956年	63.2%	10.8%
1957年	52.8%	11.7%
1958年	24.5%	15.1%
1959年	19.1%	18.3%
1960年	11.6%	26.8%
1961年	6.7%	33.8%
1962年	2.9%	44.8%

(ソ連貿易省計画経済局編 1958a: 125; ソ連貿易省計画経済局編 1958b: 127; ソ連貿易省計画経済局編 1959: 126-127; ソ連貿易省計画経済局編 1960: 138; ソ連貿易省計画経済局編 1961: 159-160; ソ連貿易省計画経済局編 1962: 167-168; ソ連貿易省計画経済局編 1963: 170-171)

4. 千里馬運動の拡大

1959年12月に陳応源は、千里馬炉爭取運動を開始した。これは、3つの作業班が交代で管理している炉そのものの生産性を高めて千里馬称号を獲得するための運動であった。1960年4月28日に陳応源が担当している炉が千里馬炉称号を獲得した(藤島 1966: 139)。社会主義建設を推進する象徴として千里馬という名称がさまざまな生産高揚運動に使われていったことを示している。

1956年の12月全員会議から推進してきた全ての生産高揚運動にも千里馬という名称が使われ、千里馬運動と呼ばれるようになった。1960年8月15日に金日成は演説の中で、12月全員会議から推進してきた全ての生産高揚運動を千里馬運動と呼んだ。さらに、第1次5カ年計画が繰り上げ完遂したのは、12月全員会議での決定によって千里馬運動を推進したためであると語った(金日成 1960c)。12月全員会議から推進されてきた生産高揚運動によって第1次5カ年計画が繰り上げ完遂したと評価されたため、生産高揚運動にも社会主義建設を推進する象徴である千里馬という名称が使われ、千里馬運動と呼ばれることになったと考えられる。

朝鮮労働党が1961年から実施することを準備していた7カ年計画では技術発展が最も重要な課題と考えられていたので、技術発展を促進するために千里馬作業班運動が7カ年計画でも続けて推

表4 千里馬作業班運動の拡大

	1960年	1963年	1965年	1966年
千里馬作業班称号を受けた作業班数	928	17,057	26,037	31,704
人員数	21,167	586,403	979,503	1,210,489
人員数のうち、労働者、事務員	21,102	213,376	319,555	408,473
人員数のうち、協同農場員	...	232,636	395,627	452,163
うち学生	65	140,391	264,321	349,853
二重千里馬作業班数	15	179	422	577
千里馬職場	...	26	123	143
千里馬工場	...	1	21	28
千里馬学校	...	3	10	14

(『朝鮮中央年鑑』1966-67年版: 174)

進されることになった。1960年8月15日に開催された8.15解放15周年慶祝大会において金日成は、7カ年計画を実施するにあたり、最も重要な課題は技術発展であると語った(金日成 1960c)。1960年8月18日から開催された全国千里馬作業班運動先駆者大会においても金日成は、7カ年計画を遂行するためには技術発展が最も必要とされるので、千里馬作業班運動をさらに推進しなければならぬと主張した(金日成 1960d)。

金日成は、千里馬作業班運動が技術発展だけではなく、共産主義思想を教育するための運動としても重要であることを強調した。全国千里馬作業班運動先駆者大会における演説の中で金日成は、千里馬作業班運動は共産主義の学校であり、最も高い形態の生産高揚運動であると語った(金日成 1960d)。千里馬作業班運動は、共産主義思想教育のための生産高揚運動でもあり、12月全員会議から推進されてきた生産高揚運動の最も高い形態であると定義づけられたといえよう。

千里馬作業班運動は、技術発展だけではなく、共産主義思想を教育する目的もあったため、工業部門だけではなく、あらゆる分野に拡大されて推進されることとなった。全国千里馬作業班運動先駆者大会において金日成は、工業部門だけではなく、農業、建設、運輸、商業、教育、保健、科学、文学、芸術など経済と文化の全ての分野で、千里

馬作業班運動を広範囲にわたって推進する必要があると語った（金日成 1960d）。この後、千里馬作業班運動は、急激に拡大していった。1960年から1963年の間に、千里馬作業班称号を受けた作業班の数は約18倍に増加し、その人員数は約28倍にもなった（表4参照）。

千里馬運動と千里馬作業班運動の定義は、1961年9月11日に開催された朝鮮労働党第4次大会でさらに明確にされた。朝鮮労働党第4次大会における報告の中で金日成は、千里馬作業班運動は千里馬運動が発展したものであり、全ての人を新しい共産主義の人間に改造する大衆的教養の方法になったと語った（金日成 1961）。千里馬運動は千里馬作業班運動を含む生産高揚運動そのものであり、千里馬作業班運動は共産主義思想教育の目的も加わった生産高揚運動の発展したものと定義されたといえよう。

朝鮮労働党第4次大会では、千里馬運動が朝鮮労働党の基本的方針を示す総路線と定められた。朝鮮労働党第4次大会における報告の中で金日成は、千里馬作業班運動が経済と文化や思想と道徳の全ての分野を包括したことによって、千里馬運動は社会主義建設を推進する朝鮮労働党の総路線になったと語った（金日成 1961）。共産主義思想教育も目的とする千里馬作業班運動に発展した千里馬運動は、経済と文化や思想と道徳の全ての分野で社会主義建設を推進する大規模な運動になったため、朝鮮労働党の総路線として定義されたといえよう。

計画通りに目標を達成することが困難となった7カ年計画が、1966年10月5日に開催された朝鮮労働党代表者会で3年延長された後も、千里馬運動は朝鮮労働党の総路線として推進され続けた。1968年5月9日に開催された第2次全国千里馬作業班運動先駆者大会に送った賀状文の中でも朝鮮労働党中央委員会は、千里馬運動は社会主義建設における朝鮮労働党の総路線であり、千里馬作業班運動は千里馬運動の発展したものであると定義した（『労働新聞』1968年5月10日）。千里馬運動を基本方針として推進されてきた7カ年計画の目標が計画通りに達成されなかったにもかかわらず、千里馬運動に対する朝鮮労働党の評価は変

わらなかったといえよう。

3年延長された7カ年計画が1970年に終了した後も、千里馬運動は社会主義を建設した運動として高く評価された。1970年11月2日に開催された朝鮮労働党第5次大会で7カ年計画の成果を報告した金日成は、千里馬作業班運動で共産主義思想教育を推進したことによって、社会主義建設に勝利がもたらされたと語った（金日成 1970）。千里馬運動の発展した形態である千里馬作業班運動が社会主義を建設する運動として高く評価されたことは、千里馬運動そのものも社会主義を建設する運動として高く評価されたことを意味する。また、共産主義思想教育を推進したために千里馬作業班運動が高く評価されたことは、北朝鮮での社会主義建設においては共産主義思想教育を推進することが最も重要な目的になったことを示している。

共産主義思想教育を推進したことで高く評価された千里馬運動は、朝鮮労働党だけではなく国家によって推進される社会主義建設の総路線と定められた。7カ年計画が終了した北朝鮮では1972年12月28日に新たに社会主義憲法が制定され、人民民主主義国家から社会主義国家になったことが宣言された。新たに制定された社会主義憲法の第13条で、朝鮮民主主義人民共和国において千里馬運動は社会主義建設の総路線であると定められた。社会主義国家になったため、朝鮮労働党によって推進されてきた千里馬運動は、社会主義を建設する総路線として国家によって推進されることになったといえよう。

まとめ

1956年12月に開催された12月全員会議で第1次5カ年計画を遂行するために問題とされたのは、労働力不足と外貨不足であった。12月全員会議から推進された増産競争運動をはじめとする生産高揚運動は、外貨不足を解決するために輸入資源を節約しながら工業製品を生産し、労働力不足を解決するために目標生産量を計画よりも高く設定することで労働生産性を高め、高く設定した目標生産量によってつくられた余剰生産物を輸出して

外貨を獲得するために推進された。

それに対して、1958年3月に開催された第1次朝鮮労働党代表者会の決定によって職業総同盟が推進した集団的革新運動は、増産競争運動における目的だけではなく、労働生産性を高めるために技術発展を促進することも目的とした生産高揚運動であった。技術発展を促進するために、職業総同盟が管理する全国的な生産高揚運動となったのも集団的革新運動からであった。

1959年3月に降仙製鋼所の陳応源作業班が発起した千里馬作業班運動は、労働生産性を高めるだけではなく共産主義思想教育と技術教育を推進することを目的としていた。しかし、職業総同盟が、千里馬作業班運動を全国に拡大しようとしたのは、朝鮮労働党が推進していた工業製品の質を高める事業のためであった。朝鮮労働党が工業製品の質を高めようとしたのは、輸出業を拡大して、外貨を獲得するためでもあった。千里馬作業班運動は、工業製品の質を高めることによって、外貨を獲得するための生産高揚運動でもあったといえよう。

1961年に開催された朝鮮労働党第4次大会で千里馬運動が朝鮮労働党の基本方針である総路線と定められたのは、千里馬作業班運動が社会全般に拡大して推進されたことによる。生産高揚運動によって第1次5カ年計画が繰り上げ完遂したと評価されたため、生産高揚運動はすべて千里馬運動と名付けられ、千里馬作業班運動は千里馬運動の発展した形態であると定義された。7カ年計画でも推進されることになった千里馬作業班運動は、共産主義思想教育も目的としているため、工業分野だけではなく社会全般に拡大されて推進された。

7カ年計画は、千里馬運動を朝鮮労働党の総路線としながらも当初の計画通りには目標が達成されず、3年延長されて目標が達成された。それでも1970年に開催された朝鮮労働党第5次大会で金日成は、千里馬作業班運動によって社会主義建設が達成されたと評価した。それは、もはや技術発展や外貨獲得のためというよりも、共産主義思想教育のためであった。

千里馬運動は、1972年に制定された社会主義憲法で北朝鮮が社会主義国家になったと宣言され

たことで、国家によって推進される社会主義建設の総路線として定められた。それは、外貨獲得や技術発展のための千里馬運動ではなく、共産主義思想教育のための千里馬運動であり、社会主義建設においては、外貨獲得や技術発展よりも、共産主義思想教育が最も重要な目的になったことを意味するといえよう。

〈参考文献〉

〈朝鮮語〉

- 金鍊鉄 2001. 『북한의 산업화와 경제정책』 서울, 歴史批評社.
- 金日成 1957. 「최고 인민 회의 제 2기 제 1차 회의에서 한 김일성 수상의 연설」 『労働新聞』 1957年9月21日.
- 金日成 1958a. 「모든 것을 조국의 통일 발전을 위하여 최고 인민 회의 제 2기 제 3차 회의에서 한 김일성 수상의 연설」 『労働新聞』 1958年6月12日.
- 金日成 1958b. 「조선민주주의 인민공화국 창건 10주년 기념 경축 대회에서 한 김일성 수상의 기념 보고」 『労働新聞』 1958年9月9日.
- 金日成 1958c. 「전국 생산 혁신자 대회에서 김일성 수상 연설」 『労働新聞』 1958年9月19日.
- 金日成 1958d. 「공산주의 교양에 대하여 1958년 11월 20일 전국 시, 군당 위원회 선동원들을 위한 강습회에서 한 김일성 동지의 연설 속기록에서 발췌한 요지」 『労働新聞』 1958年12月9日.
- 金日成 1960a. 「산업 운수 부문에서의 결합들과 그 시정 대책에 대하여 조선 로동당 중앙 위원회에서 한 보고 1954년 3월 21일」 『金日成選集』 第4卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 92-142.
- 金日成 1960b. 「인민 소비품 생산을 확대하며 상품류통 사업을 개선할 데 대하여 조선 로동당 중앙 위원회 전원 회의에서 한 결론 1958년 6월 7일」 『金日成選集』 第5卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 518-537.
- 金日成 1960c. 「조선 인민의 민족적 명절 8.15 해방 15주년 경축 대회에서 한 김일성 동지의 보고」 『労働新聞』 1960年8月15日.
- 金日成 1960d. 「천리마 기수들은 우리 시대의 영웅이며 당의 붉은 전사이다 전국 천리마 작업반 운동 선구자 대회에서 한 김일성 동지의 연설」 『労働新聞』 1960年8月23日.
- 金日成 1961. 「조선로동당 제 4차 대회에서 한 중앙 위원회 사업 총화 보고 조선 로동당 중앙 위원회 위원장 김일성」 『労働新聞』 1961年9月12日.
- 金日成 1970. 「조선로동당 제 5차 대회에서 한 중앙 위원회 사업 총화 보고 조선 로동당 중앙 위원회 총비서 김일성」 『労働新聞』 1970年11月3日.
- 金日成 1979. 「2년간의 민주건설 신문에 발표한 논문

- 1947년 8월 15일』『金日成著作集』第3卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 392-395.
- 金日成 1980a. 「로력을 절약하며 대중정치사업을 개선할데 대하여 조선로동당 중앙위원회 상무위원회에서 한 결론 1956년 2월 16일」『金日成著作集』第10卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 86-96.
- 金日成 1980b. 「인민경제복구발전계획수행에서 제기되는 몇가지 문제에 대하여 조선민주주의 인민공화국 내각 제3차 전원회의에서 한 결론 1956년 4월 2일」『金日成著作集』第10卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 109-125.
- 金日成 1981. 「3개년인민경제계획실행총화를 잘할데 대하여 조선민주주의인민공화국 내각 제3차 전원회의에서 한 결론 1957년 4월 6일」『金日成著作集』第11卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 98-107.
- 金日成 1988. 「올해 인민경제계획을 성과적으로 수행하기 위한 몇 가지 과업에 대하여 조선민주주의인민공화국 내각 제1차 전원회의에서 한 결론 1959년 1월 19일」『金日成全集』第23卷, 平壤, 朝鮮労働党出版社, pp. 85-111.
- 김덕호 [キム・ドクホ] 1960. 「우리 나라에서 집단적 혁신 운동의 발생 발전」조선 민주주의 인민 공화국 과학원 력사 연구소 근세 및 최근세사 연구실編 『력사 논문집 사회주의 건설편 4』平壤, 朝鮮民主主義人民共和國科学院出版社, pp. 78-124.
- 조근원 [チョ・グンウォン] 1958. 「천리마 만년 광산 박 영수 고속도 굴진 브리가다에서」『労働新聞』1958년 6월 8일.
- 로병훈 [ロ・ビョンフン] 1965. 「천리마운동은 우리 인민의 혁명적 의지의 구현」『勤勞者』第19号累計 281号 (10月), pp. 41-51.
- 柳吉在 1993. 「“천리마운동”과 사회주의경제건설: “스타하노프운동” 및 “대약진운동”과의 비교를 중심으로」慶南大学校極東問題研究所 『북한사회주의건설의 정치경제』 서울, 慶南大学校極東問題研究所, pp. 43-79.
- 李箕永 1958. 「오늘의 천리마」『労働新聞』1958년 11월 13, 14일.
- 李一卿 1958. 「전반적 중등 의무 교육제를 실시하며 기술 의무 교육제를 준비할 데 관한 보고」『労働新聞』1958년 10월 2일.
- 李鐘玉 1958. 「조선민주주의 인민 공화국 인민 경제 발전 제1차 5개년 (1957-1961) 계획에 관한 국가 계획 위원회 위원장 리중옥 동지의 보고」『労働新聞』1958년 3월 4일.
- 이태섭 [イ・テソプ] 2001. 『김일성 리더십 연구』서울, 도서출판 들녘.
- 陳応源 1969. 「《여기가 천리마의 고향입니다》」『인민들속에서』平壤, 第4卷再版, 朝鮮労働党出版社 (2월). pp. 47-60.
- 韓相斗 1958a. 「집단적 혁신 운동을 가일층 확대 발전시키기 위하여」『労働新聞』1958년 9월 8일.
- 韓相斗 1958b. 「집단적 혁신 운동을 가일층 확대 발전시킬 데 대하여」『労働新聞』1958년 9월 14일.
- 『조선말 대사전 [朝鮮語辭典] 2卷』1992. 平壤, 社会科学出版社.
- 『조선말 대사전 [朝鮮語辭典] (增補版) 3卷』2007. 平壤, 社会科学出版社.
- 『朝鮮中央年鑑』1956年版 1956. 平壤, 國際生活社.
- 『朝鮮中央年鑑』1959年版 1959. 平壤, 朝鮮中央通信社.
- 『朝鮮中央年鑑』1961年版 1962. 平壤, 朝鮮中央通信社.
- 『朝鮮中央年鑑』1962年版 1962. 平壤, 朝鮮中央通信社.
- 『朝鮮中央年鑑』1963年版 1963. 平壤, 朝鮮中央通信社.
- 『朝鮮中央年鑑』1964年版 1964. 平壤, 朝鮮中央通信社.
- 『朝鮮中央年鑑』1966-67年版 1967. 平壤, 朝鮮中央通信社.
- (日本語)
- 小此木政夫編著 1997. 『北朝鮮ハンドブック』講談社.
- 吳泰石・白峰・李相奎共著 1979. 『金日成その愛と革命 (第2部)』金日成勞作翻譯委員會訳, 雄山閣.
- 桜井浩 1968. 「北朝鮮における千里馬運動—生産競争としての側面から—」『朝鮮研究月報』第16号 (4月), 1-11 ページ.
- ソ連貿易省計画経済局編 1958a. 『ソ連貿易統計年鑑 1956年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- ソ連貿易省計画経済局編 1958b. 『ソ連貿易統計年鑑 1957年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- ソ連貿易省計画経済局編 1959. 『ソ連貿易統計年鑑 1958年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- ソ連貿易省計画経済局編 1960. 『ソ連貿易統計年鑑 1959年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- ソ連貿易省計画経済局編 1961. 『ソ連貿易統計年鑑 1960年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- ソ連貿易省計画経済局編 1962. 『ソ連貿易統計年鑑 1961年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- ソ連貿易省計画経済局編 1963. 『ソ連貿易統計年鑑 1962年度』國際事情研究会訳, ジャパン・プレス・サービス.
- 高瀬浄 1973. 『朝鮮社会主義経済の研究』博文社.
- 藤島宇内 1966. 「千里馬運動・青山里・大安の改革」藤島宇内著者代表 『現代朝鮮論』勁草書房, 131-167 ページ.

(ロシア語)

Министерство внешней торговли СССР. Главное планово-экономическое управление 1967. *Внешняя торговля СССР: статистически й сборник, 1918-1966, Международные отношения.*

- (1) 例えば、江南窯業工場では「生産の日」運動が發起され、平壤鉄道工場や江界人民工場では「供給がない日」が發起された（キム・ドクホ 1960: 96）。
- (2) 現在では、龍馬と千里龍馬、千里馬がそれぞれ『朝鮮語辞典』に掲載されているが、徐々に同一の意味として統合され始めている。1992年発刊の『朝鮮語大辞典』では千里龍馬と千里馬は同一の意味ではないが（『朝鮮語大辞典 2巻』:508）、2007年発刊の『朝鮮語大辞典（増補版）』では同一の意味として掲載されている（『朝鮮語辞典（増補版） 3巻』: 62）。
- (3) 千里馬作業班運動が推進される前にも、千里馬の名称が付けられた生産高揚運動はあった。1959年2月13日に両江道の林産事業所で、千里馬ブリガダ称号爭取運動を推進することが決定されたという報道があった（『労働新聞』1959年2月18日）。しかし、その後、千里馬ブリガダ称号爭取運動について一切報道されなかったため、千里馬ブリガダ称号爭取運動がどうなったのかは全く不明である。
- (4) 1953年、および1956年から1963年まで一貫して公表された輸出品目だけで表を作成した。年によって公表されていない品目があるので、輸出品の割合の合計は100%にならない。しかし、いずれの年においても、公表されていない輸出品の割合の合計が鉱物類か金属工業製品を上回ることにはなかったため、鉱物類か金属工業製品が北朝鮮において最も輸出額が大きかったといえる。